

家康公と久能山東照宮

徳川家康公を東照大神として祀る久能山東照宮。
平成27年(2015)、家康公が亡くなり四百年という節目の年を迎えるにあたって、七年の歳月をかけて豪華絢爛な社殿などが蘇った。
あてやかな社殿の奥には、静寂な雰囲気の中、家康公が眠る神廟がある。
戦国時代に終止符を打ち、天下泰平の世を目指した家康公。
久能山東照宮で、その人物像の一端にふれてみたい。

久能山東照宮に隠された家康公からのメッセージ

社殿の奥には 家康公が眠る「神廟」

「遺骸は久能山に埋葬すること」という家康公の遺命により、元和2年(1616)に亡くなると直ちに久能山東照宮に埋葬されました。家康公の遺骸が埋葬された場所に立つ神廟は、遺命に従い西向きに建てられています。

翌年に御霊は分霊され、日光東照宮にも祀られました。日本

中に東照宮というのは数多くありますが、家康公を最初に祀った原点ともいべき場所が久能山東照宮なのです。

平和への思いを託す

拝殿の正面上部(墓股)には、三つの彫刻が施されており、中央が有名な「司馬温公の瓶割り」の図です。司馬温公が子どもの頃、水瓶に落ちた友達を助けるために大切な水瓶

を割って救い出します。その話を聞いた父親は水瓶を失ったことより友達を命を救ったことを褒めたという逸話を題材にしたものです。「生命の尊さ」が込められています。家康公の最も大切なメッセージと言えますね。国民一人ひとりの命を大切にして平和な国を築くという考えを表しています。



①【司馬温公の瓶割り】

三つの彫刻と洋時計

②【三賢人と瓢筆の水】



③【瓢筆から駒】



④【洋時計】(国指定重要文化財)



鳥と花や穀物などの彫刻は、実り豊かで平和なイメージにつながっています。

教育の大切さを刻む

戦に勝つても人々が欲望のままに動いては世の中が乱れることを学び、教育の必要性を重んじたという家康公ですが、それは右側の「三賢人」の彫刻に語られています。実際に『群書治要』という、大名のために政治倫理の手本になる書

物の刊行を命じています。同時に、書物を刷るために金属活字を作らせています。

左側の「瓢筆から駒」は、あり得ない事が起こる「現代風に言えば、想定外」ということから、常に実直に謙虚にということですね。

洋時計に見る外交政策

久能山東照宮には家康公をはじめ、徳川家ゆかりの品々も多く残されています。その一つがスペイン国王より家康公へ寄贈された「洋時計」です。日本最古の西洋時計であるのももちろんのこと、世界的に見ても当時の部品が残る唯一の時計です。家康公の手元に五年ほど保管され、その後二代將軍秀忠公が久能山へ持つてきて使われることなく保管されたため、部品が交換されなかったのが幸いでした。

家康公は海外の国々と友好的な関係を築き、戦いを避け

て交易を主とした平和外交を目指していました。時計を献上されるゆえんとなったスペインとのできごとともそうです。

武器を平和利用に変えた

家康公の時代、戦は銃が主でしたが、鉄砲や火薬の製造を規制したのも平和な国づくりの一環です。駿府城では、家康公が花火を楽しんだという話が伝わっています。火薬を兵器ではなく平和なものへと転換させたのは大きな功績でしょう。久能山東照宮にも火縄銃が残っていますが、それはむしろ「平和」の象徴でもあると思います。



火縄銃

※スペイン領フリービンの臨時総督であったドン・ロドリゴを乗せた船がメキシコに帰国する途中で難破し日本に漂着。大御所家康公は、三浦按針ことウイリアム・アダムズが造船した120トンの洋式船を提供し、翌年にドン・ロドリゴほか救助された乗組員を外交交渉するための日本人とともにメキシコまで送り届けた。

